

長時間介助サービスを利用する障害者の介助関係に関する研究

○ 目白大学 金在根 (7611)

〔キーワード〕 重度障害者、介助関係、居心地のよい関係

1. 研究目的

現在、多くの重度障害者が介助サービスを受けながら地域で生活をしているが、重度障害者の生活課題を見ると介助者と関係する問題が少なくない。にもかかわらず、重度障害者の、毎日長時間にわたって介助者を介して生活するがゆえに生じる困難についてはそれほど関心が向けられていないのが現状である。また、重度障害者の生活を見ると多様な形の介助関係が存在し、その課題も多様であると考えられるが、介助サービス現場における問題解決の多くは、障害者と介助者の人間性や相性に期待している部分が少なくないと考えられる。そこで、本研究では、長時間介助サービスを利用する障害者の介助関係をめぐる実態と課題について検討し考察を行う。具体的には、自立生活センター（以下、CIL）の理念のなかでもっとも重視している「自己決定」に注目しながら、生活の主体である重度障害者と援助の主体である介助者、そしてこの二つの主体間に介入して調整を行う事業者の3者の立場から考える。

2. 研究の視点および方法

本研究における「介助関係」とは、社会構造の下で必然的に発生する障害者と介助者の非対称的関係を前提に、自立生活理念の実現を目指して形成する障害者と介助者の関係とする。そして、本研究では介助サービス事業者の中で自己決定を重視しているCILを対象に行った。本研究の実施に当たっては「東京都自立生活センター協議会」の協力のもとに、2018年9月から「介助関係研究会」を立ち上げ、重度障害者の介助関係における問題について話し合いつつ、アンケート調査の内容をまとめた。その後2021年8月に「全国自立生活センター協議会」の協力を得て、全国のCIL約120カ所にアンケート調査を依頼し、障害者、介助者、CILを対象にアンケート調査を実施した。その結果、CIL30、障害者60、介助者77件の集計ができた。アンケート調査項目は、障害者対象は「基本情報」「人間関係・社会活動」「介助者の基本情報」「派遣事業所について」「介助者との関係について」であり、介助者対象は「基本情報」「派遣事業所について」「利用者と介助サービスの情報」「介助関係について」、事業者対象は「基本情報」「介助サービスの調整について」「利用者の自己決定について」「介助関係について」となっている。

* 本研究は、科学研究費助成事業（若手研究；平成31～34年度）を受けている。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守して行った。アンケート調査への協力は任意であり、記入はすべて匿名で行ったことと、結果の学会への公表についても承諾を得た。そして、障害者の記入においては多様な方法を提示して障害への配慮を行った。

4. 研究結果

障害者の調査結果を見ると、障害者の約7割の人が現在介助者の中で「一緒にいると居心地がいいと感じる介助者は半数またはその以下」と答えた。また、障害者の約5割の人が「利用者の生活を理解して介助している者は半数またはその以下」と答えた。他には、「介助サービス中に一人の時間が欲しい」と答えた人が約6割であり、その理由として「気疲れ」「息が詰まる」などがあつた。一方、介助サービス中に一人の時間を設けたいが難しいと答えた人が23.2%であつた。そして、障害者にとって望ましい介助者像は「利用者の自己決定を尊重して指示通り行動する人」より「一緒にいると居心地のよい人」の方の優先順位が高かつた。

介助者の調査結果を見ると、介助者になつたきっかけとして「自分に合う、やりがいがある」と答えた人が半数以上である一方、介助中にやる気を失うときが「普通にある・少しある」人が半数以上であつた。そして、介助者にとって望ましい利用者像は、「居心地のよい人」が最も多く、その次に「有意義な生活を送っているように見える人」が多かつた。利用者像に関する自由記述では「この人生をどう生きたいか、何をしてみたいか、など自分の気持ちと向き合っている人」「自分の人生を有意義に送れている方」などがあつた。

事業所の場合、利用者と介助者の現在の関係性について、「対等な関係と言える」が48.3%、「利用者が優勢になっている関係が多い」が20.7%、「介助者が優勢になっている関係が多い」が24.1%であつた。このことから、事業者は、対等な関係を除くと、障害者より介助者が優勢の介助関係の方が多いと見ていることが分かつた。

3者の「介助を利用することによる障害者の自己決定の実現の度合いが8割以上」と答えた割合を見ると、障害者は82.7%、介助者は72.8%、事業者は73.4%であつた。

5. 考察

CILは障害者の自己決定を最も大事にしつつ介助サービスを運営しており、それについては、介助サービスを利用している障害者及び介助を行っている介助者も一定の共通認識をもっている。しかし、重度障害者は多数（本研究の対象者の場合、毎月に入る介助者の人数は平均11.5人であつた）の介助者と付き合いながら生活をしており、その中では「自己決定の重視される介助関係」より「居心地のよい介助関係」の方を求めていることが見られた。そして、現在の介助関係において「居心地のよい介助関係」の実現は難しいことがあり、その背景には介助者の意識及び事業者のサポート体制があるように見えた。

介助者も利用者と「居心地のよい関係」を求めていることは同じであるが、その他に、障害者に「有意義な生活」を求めていることがあり、その期待が叶わない場合は「やる気を失う」ことや仕事に対する葛藤が生じることが考えられた。最後に、事業者は、介助関係の主体性の現状についてやや悲観的でありつつ、その介助関係の改善のためには事業者のサポート体制が最も重要であると認識している。